



TITLE:

近現代ドイツ文学における「人工的」な様式ーヨハン・ハインリヒ・フォスの詩的技法を中心にー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

松波, 烈

CITATION:

松波, 烈. 近現代ドイツ文学における「人工的」な様式ーヨハン・ハインリヒ・フォスの詩的技法を中心にー. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22082>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	松波 烈
論文題目	近現代ドイツ文学における「人工的」な様式 —ヨハン・ハインリヒ・フォスの詩的技法を中心に—		
(論文内容の要旨)			
<p>芸術のみならず、（自然）科学や社会および政治と経済から歴史にいたるまで、およそ人間の営みすべての領域において、文字通り古今東西を通じて「人工的」な様式と「自然」の対立が存在し争ってきた。そのような状況において申請書が目し本論文のテーマとしているのが、いわゆる近代ドイツ擬古典主義（„Klassizismus“）というきわめて特殊な対象の考察である。その後19世紀後半から現在に至るまで、因習に囚われた独創性に乏しい形式主義者として負の烙印を押され無視されてきたテーマであり、日本においてはもちろん、ドイツ語圏においてもほとんど取り上げられたことがないテーマだからである。（もっとも、擬古典主義のいわば創始者であり、もっぱら創作を志向していたフリードリヒ・ゴットリープ・クロプシュトックは、例外的に今日の文学史においても高く評価されている）。</p> <p>そういう中で申請者は、擬古典主義者たちの「技巧」が決して因習の単なる模倣でなく、かれらを縛っているのではなく、むしろその新しく独創的な近代ドイツ語韻文創造の根幹として作用してきたという大胆な仮説を提起している。そして、申請者がそのような主張の根拠あるいは素材として依拠しているのが、上述したクロプシュトックの後継者と目され、創作よりも詩論や古典の翻訳を志向していたヨハン・ハインリヒ・フォスに他ならない。申請者はそのフォスを引用しつつ、「自然」は究極の目標として否定しないものの、目指すものは「無技巧の自然風〔die kunstlose Natürlichkeit〕」ではなく、あくまで「技巧で精錬した自然〔die durch Kunst veredelte Natur〕」であるというかれらの主張を支持する。これは、先行研究に対する断固とした異議申し立てであり、文学史の定説に対する多いなる挑戦といわねばならない。実際また申請者も言及しているように、本論文の普遍性を担保するために取り上げられているハインリヒ・フォン・クライストの文明論・芸術論『マリオネット劇場論』は、従来から物議を醸していたが20世紀末から21世紀にかけてのポストモダンの時代において、「自然」や「無意識」が必ずしも「技巧」と「意識」に卓越するものでないことを巡ってますます錯綜した解釈を頻出せしめている（第1章）。</p> <p>ところで、そのような擬古典主義者たち、ないし「厳格派（„Rigoristen“）」の韻文の内実は、およそ以下のようなものであり、それらはもっぱら本論文がテーマとして掲げる詩的技法の中心となる詩学書でありながらほとんど取り上げられたことのない『ドイツ語の時量計測〔Zeitmessung der deutschen Sprache〕』の申請者による解説に基づくものである。すなわちかれら「厳格派」は、古典韻文の長短音量を近代ドイツ語の強弱に機械的に置き換える単なる「アクセント主義」ではなく、そこに意味の重要性を付け加え加味した「意味主義的音律学」という新しい原則を創り出そうとする。つまり、「技巧」を模倣しただけの「アクセント主義」ではなく、なるほどその「技巧」を生かし従いはするが、それは盲目的な模倣ではなく、新しい原則「意味主義的音律学」を模索する創造なのである（第2章）。</p> <p>さらにかれら「厳格派」の中でも特に厳格なフォスの詩的技法の特徴は、「アンフィブラハ語脚」の徹底した排除と、「滑奏スポンデウス〔geschleifter Spondeus〕」の考案とその頻繁な使用である。「アンフィブラハ語脚」とは、幹綴の前後に副意味音節がしばしば隣接するというドイツ語の音韻特性上、とりわけ頻繁に生じる。おそろしく生</p>			

じやすい・ありがちな・自然的な語脚の代表である。この自然な音声リズムをフォスは徹底して忌避する。このような詩作の方向性は、また、意識的であり、よって人工的である。力まない自然体の、自然な流れに逆らわない感性の表出を否定することになるアンフィブラハ語脚の排撃は、「技巧」の最たるものと言わねばならない（第3章）。

次に「滑奏スポンデウス〔geschleifter Spondeus〕」であるが、たとえば*vieltönig*という語は、高音の長音節 *viel-*が詩脚後半すなわちテシスに置かれ、低音の長音節 *-tön-*が詩脚前半すなわちアルシスに置かれると、韻律上は、アルシスの音節は音を上げ、テシスの音節は音を下げるとされる。よって、高音を有する*viel-*の音が下げられ、低音の*-tön-*が音を上げられる。こうすると、語本来の音の高低（*vieltön-*）が韻律上の音の高低（*vieltön-*）に相殺されて、*vieltön-*という2音節（↑↓）が音の滑らかなスポンデウス（→→）に転じる。これが「滑奏スポンデウス」である。これはまた、テシスの一つきりの音節に意味が十分に乘っていない場合、この音節が「文字面」上すなわち古典語風の発音で長になるように、意志的意識的に配慮する場合にも当てはまる（第4章）。

第5章で取り上げられるのは、1960年代以降から今日までドイツ語文学界の一角を占めてきた前衛芸術の「具体詩」である。申請者によれば、作品世界内部のみにて生成展開し完結充足するという自己目的傾向、言語の可能性を専ら言語の力に即して突き詰めようとする努力、という契機を共有している点を勘案するならば、18～19世紀叙事詩の詩学と20世紀具体詩の詩学を接続する論も有り得るという。

(論文審査の結果の要旨)

(論文内容の要旨) において述べたように、18世紀後半から19世紀のドイツ語圏において古代ギリシア・ローマの韻文詩に憧れ、その技巧と規則に溢れた古代韻文詩を近代ドイツ語に再現しようと試みた「擬古典主義者 („Klassizisten“)」ないし「厳格派 („Rigoristen“)」(古典の技法に忠実という意味で、当時はこう呼ばれることが多かった)は、その後19世紀後半から現在に至るまで、因習に囚われた独創性に乏しい形式主義者として負の烙印を押され、無視されてきた。特に因習からの自由と「自然」をモットーとするゲーテらの古典主義 („Klassik“) の独創性と好対照をなすものとして酷評され続けてきた。

そういう中で申請者は、擬古典主義者たちの「技巧」が決して因習の単なる模倣であり、かれらを縛っているのではなく、むしろその新しく独創的な近代ドイツ語韻文創造の根幹として作用してきたという大胆な仮説を提起し、十分な説得力と論理的整合性をもってその論証に成功している。これは、先行研究と文学史の定説に対する多なる挑戦であり、その大胆さと独創性は大いに評価と賞賛に値する。

さらに、申請者の解説と解釈は、後述するように、もっぱらヨハン・ハインリヒ・フォスの詩論と古典の翻訳を素材としているが、実際に本論文を読んでもみると、フォス以外に当時の多くの詩人や詩学者が取り上げられているのが分かる。いわば師であるクロプシュトックは当然であるが、あまり関係が取り上げられないアウグスト・フォン・プラーテン、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルやカール・フィリップ・モーリッツらであるが、かれらの「厳格派」としての繋がりを問題にすることによっても、本論文は文学史のいわば新しいパラダイムを提示しているといわねばならない。

実際また申請者も言及しているように、21世紀に入り従来の文学史の常識と定説に疑問を投げかける『古典古代の変容〔Transformationen der Antike〕叢書』の刊行が始まっており、ようやく従来の定説についての再考と検討が始まっている。また申請者が本論文の普遍性を担保するために取り上げているハインリヒ・フォン・クライストの文明論・芸術論『マリオネット劇場論』は、従来から物議を醸していたが20世紀末から21世紀にかけてのポストモダンの時代において、「自然」や「無意識」が必ずしも「技巧」と「意識」に卓越するものでないことを巡ってますます錯綜した解釈を頻出せしめている(第1章)。申請者が提示するこのような状況を考えれば、申請者の提起する仮説は、なるほど大胆なものではあるが、根も葉もない荒唐無稽なものではないといわねばならない。

ところで、そのような仮説とその証明にあたって申請者は、本論文がテーマとして掲げるヨハン・ハインリヒ・フォスの詩学書(『ドイツ語の時量計測〔Zeitmessung der deutschen Sprache〕』)とその実作を素材として取り上げ論じているが、第1章においては、クライストの文明論・芸術論『マリオネット劇場論』を取り上げ、論文の最終章である第5章では、現代の具体詩を取り上げている。本論文が近代ドイツ語韻文文学作品という、きわめて特異なテーマを論じていることを考慮するなら、なるほど、現代(現在)との関係を模索し、また議論の普遍性を担保するために広く芸術一般と文明全体を視野に入れたという申請者の意図は、理解できなくはないが、現状ではこの試みがうまく機能していないという意見があった。

しかし、一方においてこの2章が論文のいわば樁となって全体を締め括っているという面もある。特に第1章のクライストは、第5章よりは全体との繋がりが感じられ、それなりに興味深い指摘や示唆に富んではいる。申請者は、もう少し議論を整理し、そこで出てきた概念や議論について慎重かつ丁寧に説明すれば、さらに説得力の

ある論文になると思われる。

とはいえ、現状のままでも本論文は、従来の研究と文学史の定説に真っ向から異議を唱える大胆さと独創性は大いに評価と賞賛に値する試みであり、申請者は十分な説得力と論理的整合性をもってその論証に概ね成功しているのは確かである。さらにまた、膨大な詩行を具体的に一言一句解説する申請者の、ドイツ語はもちろん古典諸語に対する卓越した能力もきわめて高く評価しなければならない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年7月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降